

タイトル：「白友禪」

元にした作品：「水魔」

著者名：和織

文字数：4,999

あらすじ：密かにパパ活を行っていた加奈は、それを知った同級生から脅迫され金を渡していた。ある夜、疲れ切って石橋から川を眺め死を感じていると、そこに突然、美しい少女が現れた。少女は加奈に言った。「救ってあげる」と。

加奈は最初から、その川上という同級生が好きになれなかった。彼に対しては愛想笑いすらくれてやる気になれなかったので、極力関わらないようにしていた。昔から、そういうのを「お上手」にできない質だ。だから相手から嫌がらせをされることもあったが、「お上手」をするより胸を張っていようと、彼女は決めていた。川上は一見、明るくて人懐っこい。だが、その裏側に意地の悪さが張り付いているように、加奈は感じていた。そしてそういう予感は、いつも当たった。けれど今回に限って、加奈は自分を貫くことができなかった。「パパ活」が胸を張れるようなことではないという自覚が、はっきりとあったからだ。

そういう行為を胸を張ってやっている人たちを、否定する気にはなれない。でも少なくとも彼女自身は、後ろめたい気持ちでそれを行っていた。やはり、絶対に隠しておきたい事実だった。だから「パパ活」が川上にバレて脅迫されても、ただ彼に屈するしかなく、そんな自分を許せない気持ちで、加奈は窒息しそうだった。

今日も一仕事終了した彼女は、駅へ向かう途中にある石橋の上でふと立ち止まり、欄干に身を寄せた。橋の下で、川が夜を映している。それを眺めながら、「そういう可能性もあるんだろうな」と、加奈はそれを、わりと現実的に受け止めた。これ以上屈辱的な思いをする前に、なんなら今、終わりにするべきか？それなら、あんな奴に金なんて渡さなければよかった。結局、自分の今までって何だったんだろう。そう考えていると、風と一緒に甘い声がした。

「困った顔してる」

そちらを振り向くと、思わず目を見張るほど美しい少女が立っていた。潤んだアーモンド型の瞳、その黒目と艶々と光るおかつぱの髪はどちらも漆黒で、それが肌の白さを際立たせている。ツンとした鼻に、ぷっくりとしたオレンジの唇、細い首に、華奢な肩。高校生くらいに見えたが、その幼い見た目にそぐわぬ雰囲気纏っていて、藍色に白の友禪模様という渋めのワンピースが妙に似合っている。しかし、一しきり見とれ終わると、ほんの数年前は自分もこんな子供だったなど、加奈はしっかり冷めた気分に戻った。

「どっか行って」

うんざりした顔を見せつけるようにして、加奈は言った。けれど少女は笑顔でこう返す。

「死にたい？」

「・・・は？」

「死にたい人は、みんなそうやってここから川を眺めるの」

そう言って少女は、面白いものを見つけたように加奈を見つめる。その視線が気味が悪くて、加奈は目を逸らした。

「関係ないでしょ」

「私ね、いつもここで、そういう人たちからお話を聞かせてもらうの。お姉さんは、どうして死にたいの？」

少女は加奈の顔を覗き込み、加奈は思わず一步後ずさる。

「趣味悪いと思う。そういうの」

「でも、救われるよ」

「救われる？」

「生きてることって自分で終わりにできるけど、死んだ後はもう、自分を終わらせることはできないでしょう？死んだら精神が楽になるなんて保証ないし、苦しんでることを吐き出さずに死んじゃったら、ずっとそれに縛られたまま、死に続けるしかないんだよ」

そう言われ、加奈はため息を吹き出すように笑った。

「生き地獄で我慢しろって、そういう説得？」

「どうせいなくなる気にいるなら、苦しいこと、私に渡してみたら？っていう、提案」

少女はそう言って微笑み、川を眺める。その美しい横顔を見ていると、どういう訳か、加奈の気持ちはとても静かに、その川のように、静かで穏やかになった。そうだ、ずっと誰かに聞いてほしくて、でも誰にも言えないから、苦しかった。彼女の言う通り、どうせ死ぬなら、吐き出せばいい。きっとこの少女以外には誰も、今の自分を、先入観無しに受け止めてくれはしない。そういう考えが、スルスルとリボンのように、加奈の全身をなぞった。

「私・・・パパ活なんてさ、非常識だってわかってやってるの。でも時短で稼げるし、コンビニのバイト減らせば勉強する時間増やせるし、将来の為に、今から奨学金返済の貯金しておきたかった。なのに、一番最悪な奴にバレたんだ。隠し撮りされてて、脅されて、今じゃあいつの為に稼いでるようなもんだよ。親の金で大学入って、いい部屋住んで、ろくにバイトもしてないような奴に・・・あいつは金が欲しいんじゃないで、人が必死に稼いだものを取るのが面白いだけなの。私はただ、普通に就職して、平凡に生きていこうとただけだよ。何でそれだけのことが駄目で、あんな奴がふわふわ生きてるのは許される訳？」

吐露していると、加奈の目から涙が溢れた。少女は、そんな彼女の頬にそっと触れる。

「手にしているのが「常識」なら、いくら振り回して攻撃しても構わない、訳ないのが常識なのに、やっぱりみんな、楽しいから止められないんだね、そういうの」

「実際、私が正しくないことしてるのも事実だけど・・・」

「正しさなんて、追及したり認めさせたりしても、何の意味もないのに」

そう言って自分を真っ直ぐに見る美しい少女が、神のように見え、ついにおかしくなったか？と加奈は思った。でも、まともでいようとするより、ずっと呼吸が楽だった。

「大丈夫、救ってあげる。私みなわっていうの。願いが叶ったら、またここにおいで」

救う？でもどうやって？と、加奈は一度視線を落としてから、それを問う為に顔を上げた。が、そこに少女の姿はなかった。

「あれ？」

加奈はしばらく、きょろきょろと辺りを見回した。そんな彼女の様子を、通りすぎる人々がチラチラと見るばかりで、みなわと名乗ったその少女は、やはりどこにもない。現れたときと同じで、風のように消えてしまった。加奈は夢でも見ていたような、というより、夢の中へ迷い込んだような気分のまま、石橋を後にするしかなかった。

翌日も、加奈の思考はずっと、夢を彷徨っているように上の空だった。授業なんて受けるだけ無駄だったなど、大学に来たことを後悔しながら、コンビニのバイトへ向かった。生きているなら、どんなときでも、金を稼がない訳にはいかないからだ。

「救ってあげる」と、みなわは言った。加奈は、その不思議な、幸福を授けられたような感覚にしか、もう縋れるものはないような気がしていた。そして、受験の結果を待つような不安と期待で膨らみ切った思考のまま仕事をしていると、ミスを連発した。新人よりも使えないような有様で、結局は具合が悪いと言って早退する羽目になった。

欄干に片足で立っているような精神状態で帰り道を歩きながら、そんな現実を前に、彼女は今や夢から醒めかけていた。やっぱり自分は、ただからかわれただけなのでは？と。だから、通知音でスマホに目を落として、驚愕した。それは、他ならぬ川上からのメッセージだった。

『突然だけど、これまで悪かった。画像は消した。コピーはない。誓って、誰にも言っていない。今この瞬間、全部終わりにする。お互い忘れて、元の同級生に戻ろう』

加奈はそれを読んでから、天を仰ぎ、しばらくして、呆れたように笑った。お互い忘れて？偉そうに・・・でも、みなわ、本当に彼女が？それ以外考えられないけど、どうやって？神様でもなければ・・・そう思うと興奮で身震いし、加奈は走り出した。

石橋に着いた加奈を見て、みなわは待ち構えていたように笑った。昨日もそうだったが、彼女がそこに居ると、なぜか誰も橋を渡ろうとしない。

「本当にあなたが解決してくれたの？何をしたの？」

加奈はみなわに走り寄った。

「少し、お話しただけ」

そう言いながら、みなわは欄干に肘をつき、手の上に小さな顎を乗せる。

「お話って・・・だって私、大学とか名前とか、何も教えてないのに・・・」

「お姉さん」少女は潤んだ瞳を大きく見開いた。「過去が増える分、人生には終わりが積み

重なっていくじゃない？生きるこつて、増え続ける「死んだ自分」を、どれだけ引きずって歩けるかってことなのかな」

そう言つて体を翻し、みなわは背中で欄干に寄りかかる。加奈は、わからない、という風に、ただ黙つて首を傾げた。そんな彼女を見て、みなわは可笑しように笑つた。

「私はね、目いっぱいお腹が膨らむのつて、好きじゃないの。今、「足りて」いれば、それで十分。でも人間は、そういう訳にはいかないことばかりだよな」

神だと思つた少女を、加奈は急に、正反対の存在に感じた。

「・・・何が言いたいのか？」

「うーん、せつせと未来を拵えても、今を生きられなくなつたら世話ないね、つて」

みなわはそこで、初めての表情を見せた。それまでの輝くような笑顔とは違い、全てを見透かしたように、いやらしく、ニヤリと笑つた。加奈は、息が止まるほどゾツとした。

「私が助けてあげるのは一度だけだから、せいぜい、頑張つてね。あ、対価はちゃんともらつたから」

「対価？」

「大丈夫。お姉さんはもうあの人からいっぱいとられたから、お姉さんからは要らない」

そう言つて、みなわは欄干に体を沿わせ、川の方へ大きく背中を反らせる。

「何やつて・・・」

加奈が一近づこうとしたとき、少女は、まるで容器から外されたゼリーの様にスルツと、水の中へ落ちた。加奈は、声を上げることもできなかつた。人が川へ落ちた筈なのに、そこには一切の水音も、一粒の水しぶきすら、なかつた。

\*\*\*

川上はその日、大学で美少女を見つけた。その少女は少し困つた表情で、キャンパスの案内図を見ていた。彼はその横顔に吸い寄せられるように彼女に近づき、声をかけた。「見学ですか？」と言うと、「はい、そうなんです」と少女は答えた。傍で見るとより一層美しく、彼は内心、これを機に何とかこの子と知り合いにならなくては、と意気込み、大学の案内を買つて出た。

天使のようなその少女は、みなわと名乗つた。川上は彼女に気に入ってもらおうと、大学と自分を必死にアピールした。授業はいいのかと少女に訊かれたが、今日はたまたま一限だけだつたと嘘をついた。サボるにしても、大学に貢献しているのだからまあいいだろうと、よくわからない理由で、彼は勝手に納得した。しかし、みなわに「どうしてここを受けようと思つたのか？」と質問すると、その答えによって、一気に複雑な気分になつた。みなわが、加奈と知り合いだつてわかつたからだ。しかも彼女は、加奈をとつても尊敬しているという。加奈がいるのもあつて、この大学を受験しようと思つた。でもそれを本人には秘密にしてい、受かつたらサプライズにするつもりだ、と言つた。

「同じ学部の人だったなんて、すごい偶然。でも加奈ちゃんには、絶対、内緒にして下さいね」

そう言って、みなわは手錠のような笑顔で川上の手に触れた。

大学を案内した後、川上はみなわを駅まで送ろうとした。しかし、彼女が少し周辺を歩いてから帰ると言ったので、彼もそれに付き合うことにした。みなわは、まるで目的地がある様にスラスラと歩いた。「どこまで行くの？」と何度か訊きかけ、でもそれを言ったらこの幸せな散歩が終わってしまう気がして、結局それを口にせず、川上は彼女と一緒に歩き続けた。少女は終始楽しそうで、自分たちがいい雰囲気であるのは、決して思い上がりではないと、川上は感じた。しかし嬉しい半面、徐々に疚しさが膨らんでいった。このまま上手く行って、来年には本当に、この子と自分は同じ大学に通っているのかもしれない。そう考えると、惜しくはあったが、みなわの大事な友人への脅迫行為には、早急に終止符を打たざるを得なかった。

友達に連絡を入れると言って、川上は一度みなわから離れた。画像を消去し、最速で加奈へメッセージを送ると、彼はとっととみなわの待っている石橋へ戻った。いつの間にか、日が落ちていた。

「お友達、大丈夫？」

みなわはそう言って、川上の顔を覗き込む。

「うん、全然」

「そう・・・いい子ね」

「え？」

少女は首を傾げ、じっと川上を見つめた。上目使いの輝く瞳を見ていると、川上は告白でもされたような気になった。

「ねえ、お腹空かない？時間大丈夫なら、なんか食べに行こう。好きなもの奢るよ」

「いいの？じゃあ、お願い・・・」

みなわは彼に向けて自分の白い小さな手を差し出し、誘う様に笑った。川上は少し惑い、でも嬉しそうに、その手を取った。次の瞬間、橋の上から、人の姿は消えていた。

「川上が行方不明になったらしい」という噂を加奈が耳にしたのは、あの不可解な出来事があった日から、三日後のことだった。